

# 音 合 の 町 崎 黒

## 新聞からたどる黒崎の歴史 (六十五)

いくり網漁は三面川で今も続いているが、大野やその周辺では戦前から見られなくなつた。

(先月号からの続き)

いくり網は、横二間位(約三メートル六十四センチ)、縦三間半位(約六メートル三十七センチ)の一枚網で、その縦の部分をつ二つ折りにして、その半分の部分の両端に竹を通し、残る部分は袋となり、その袋の端から竿立ての手元まで鮭のあたりを知らせる網がついている。いくり漁は漁船(小舟)が二艘と、漕ぎ方一人ずつ二人、網に通した竹を肩にかけて網を水の中に入れ網を張る竿立ての役が二人の計四人で行われた。

まず、二艘の舟が平行して川を下り、竿立てが竹を肩にかけた網を水中に入れ、川底を引きずるように引く。両舟の漕ぎ方は二本の櫂をわつさがきして漕ぎ、出来るだけ早く川を下る。そして、のぼってきた鮭が網にあたる、その感触で竿立てが互いに合図し、「お、つ」と急いで舟を漕ぎ寄せて網をすくいあげて鮭を捕らえた。

この漁法は三面川で今も続いているが、大野やその周辺ではもう戦前のころから見られなくなつた。しかし、筆者の子供の

ころの記憶の中に、中ノ口川のいくりかき漁の様子が、今もあざやかに残っている。

大野町裏でのいくりかきは見たことがないが、北斎場(大野諏訪神社裏の中ノ口川)で、下塩俵(現在白根市)の人たちが二艘の舟で気合をかけながら網をあげている光景を、今も筆者は忘れない。

このいくりかき漁の取材の中に、かつて板井や金巻にもこの漁法が行われていたことを知り、何時も取材の世話になっている田辺正二さん(板井)を訪ねてみた。そして、幸運にも田辺さんのお父さん半治さんが、大正十四年、田辺さんの子供のころ近所の茨木清七さんたちと組んで(外の二人の名は不詳)、板井の中ノ口川でいくりかき漁をしていくことが分かった。注 板井には外に二組位のいくりかきがあったという。

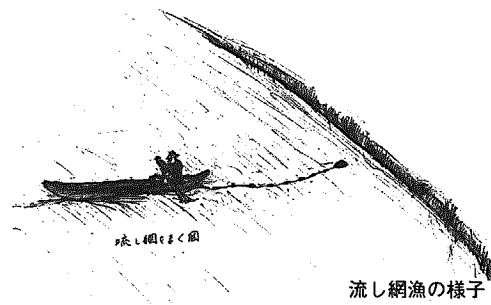
また、金巻にも居たといういくりかきについて、安藤忠治さんがまだ子供のころ、父親の弥忠治さんが(外の金巻の人の名は不詳)中塩俵の笠原はん四郎

さんと船(稲を積み船)を一艘ずつ出しあつていくりかきをしたというのである。

### ③ 流し網漁

流し網漁をする人を流しかきといつた。流し網漁に使用する網は昔から大きく変わったが、その漁法はほとんど変わらぬ。ただ、船を進める櫂がエンジンとなった。

筆者も昭和二十年ころから十数年ほど、流しかきをしたことがある。当時は、長い戦争が終わつたばかりで、新潟の信濃川河口は、上流から流れてきた土砂の沈殿によつて埋まり、信濃川の水は、はるか沖合まで張り出し、そのためが大野付近の中ノ口川や信濃川にもたたくさんの鮭がのぼつていた。しかし、当時流しかきの使用していた網は、現代のような鮭がのぼつてきてあたられば必ず捕まえることがで



流し網漁の様子

きる精巧なナイロン製の網ではなかつた。麻や、麻の代用品のようなラミ糸の網がほとんどで、柿洪をつけた網はくわらくわらとまき易かつたが、それだけ鮭のからまりも悪かつた。当時の流し網の寸法は、横が十五間弱(約二十七メートル)で、縦が七丈一尺位(約三メートル三十七センチ)の細四角形の一枚網で、網の目の大きさは普通五寸三分位(約十六センチ)で、たいていの鮭がえらのところで止まるようにつくられていた。また、網の上につけていて、手で持つて網を張る手縄には、葉といつて長さ二十センチ位で、幅四センチ位、厚さ二・五センチ位の平たい木のうきが九十七センチ位の間隔に取り付けられていた。

流し網の漁法は、一人で舟を漕ぎながら次のようにして行う。すてのうき(網の一番端に付けた標識)を川の中に投げ入れ、舟を進めながら網尻(網のすその部分)を川の中に入れる。それから、葉を順序よく次々と網が張るように舟を漕ぎながら網をまき終るのである。まき終ると手縄の端を手を持ち網を張つたまま網と一緒に川を下る。夜間の場合は全く何も見えないので、のぼってきた鮭が網に驚いてからまり、ぐつぐつと網を引くその手縄の感触で鮭のかかつたのを知つたが、それはなんともいわれぬ気持ちだつた。昼間網を流すことを、昼川といつたが、流しかきにとつて

昼川は視界がよく、鮭のはねる

のなどがよく見えて最高の楽しみだつた。やはり手縄の感触が大事で緊張したが、鮭が網にかかる、だぼだぼとはねて葉を四枚も五枚も水の中にもぐしているのを、そりりそりりとぐりよせる大きな銀色の鮭が静かに泳ぎながら浮かんでくる。この時、鮭をたまげさせないのがこつで、網と一緒にそつと鮭の下に手をまわすと、さつと一気に舟の中に入れる。その時の醍醐味は今も忘れない。

### 流しかきの漁場

戦後間もないころ、大野の流しかきの多くは下流の善久の内川場や、大川(信濃川)あたりまで流しに行つた。また、昔から町裏場と呼ばれた七区から新田町へかけての中ノ口川には何時も大勢の流しかきがあった。当時、大野の流しかきは、たしかなこととは分らないが、五十艘以上はあつたように思われる。町裏の川幅は今の二倍位もあり、流れもぐんと強く、櫂で川をのぼるのはなかなか大変なことだつた。大万さんの裏あたりから舟を漕ぎ出して網をまき、今の信濃川大橋(昭和二十五年架橋)のあたりまで流して網をあげたが、この網とり付近でよく鮭がかつた。この漁場の船着場には、さかりのころは何時も十艘以上の流しかき舟がばんこ待ちに並び賑わつたものである。(続く)

※お詫びと訂正 先月号の大野と鮭の中で「オス鮭をカ。メス鮭をメナ」といつた。と掲載するところ、誤つて掲載しました。お詫びして訂正します。



「広報くささ」は資源保護のため再生紙を使用しています。

平成十年六月一日発行(毎月一日発行) 四一七号 発行/黒崎町役場 千九五〇一一九六 新潟県西蒲原郡黒崎町大野(八四三)一 電話/〇二五三七七三二〇一 編集/企画工藤 担当/広報社計係 印刷/小野塚印刷株